人間発見

NPO法人JEN事務局長

木山（きやま） 啓子（けいこ）さん

紛争・災害地に心のケアを ①

イラク戦争、ハイチ地震など19カ国で200万人支援

難民が自立する力を取り戻すまで支え続ける

新潟県中越地震で住民に頭を下げ地域おこし

国際緊急支援を手掛ける特定非営利活動法人（NPO法人）JEN（ジェン）事務局長の木山啓子さん（51）は、この分野で日本を代表するリーダーのひとりである。イラク戦争、ハイチ地震など紛争・災害で被害を受けた19カ国で約200万人を支援してきた。出発点は1994年、民族紛争が続く旧ユーゴスラビアだった。

あるとき、クロアチアで激戦地となったブコバル近郊の教会を訪れました。家族を失った高齢者が身を寄せる教会を支援するためです。80代の女性が私に訴えました。「私の願いはただひとつ、一日でも早く死ぬことです」。そのときの無力感は忘れられません。紛争や災害で過酷な経験をすると、精神的エネルギーを奪われてしまいます。人は誰しも自立する力を持っている、それを取り戻すための心のケアを続けてきました。

編み物プロジェクトは、そのひとつ。深く傷つき引きこもっている女性を、編み物の会に誘います。あいさつすらできなくなっている人にソーシャルワーカーが「おはよう」と声をかけ、「小鳥に餌をやったの？」などと興味を引く話題を振る。女性は次第につらい体験を口にするようになります。語ることで心の重荷をおろし、仲間で支え合う輪ができていきました。2カ月がたつと、最初は無表情のまま手を動かしていた女性たちが民謡を歌い始めた。3カ月後にセーターが完成。自信が芽生え表情は笑顔に変わったのです。

旧ユーゴ地域で14の拠点をつくり、職業訓練など現地の人が自立するための支援にも力を入れました。6年間、現地責任者として仕事を任され、JENには育ててもらったと思います。この間、国連から採用の話もありましたがお断りしました。給料が5倍になり、経歴にハクがつく。しかしコソボ空爆が始まりJENから最も必要とされているときに、恩をあだで返すことはできなかったのです。

「難民支援を続ける原動力は何か」と聞かれると、難民の悲しい表情が頭に浮かぶ。

95年に一時帰国して旅に出た神戸で阪神大震災に遭いました。幸いケガはなく新神戸駅前のホテルに避難しました。今の自分なら、ホテルに集まった人をボランティアとして組織化し救助に向かいますが、当時はまだ実力不足で何もできなかった。

チェチェンへの出張が決まっていたので夜にはタクシーを飛ばして大阪へ。東京に戻ってからユーゴへ。そしてモスクワ経由でチェチェンへ。急ごしらえで難民キャンプとなった寝台車には人があふれていました。どの顔も希望を失い悲しみに満ちていた。「ああユーゴの難民と同じ表情だ」と思いました。「こうした悲しみと向き合い続けられるのか」。自問自答しました。しかし逃げる方が、もっとつらい。「悲しいと感じなくなったら、この仕事を辞めよう」とこのとき心に決めたのです。

2004年の新潟県中越地震ではJENとして初めて国内の支援に取り組み、過疎地の地域おこしへと発展した。

出張先のアフリカ、エリトリアで新潟の大震災を知りました。日本のスタッフを通じて調べたところ、ボランティアの調整役がいなくて現場が混乱しているとのこと。急きょ事務所兼住居を構え、調整に乗り出しました。

2カ月後に仮設住宅が完成し、緊急支援は終了しました。しかし冬を迎えて高齢世帯の雪かき、さらには山あいにある十日町池谷集落では人が離れ、過疎化が進む心配が出てきました。そこで廃校になった小学校を拠点に除雪や農作業のボランティアを月1回、続けたのです。最初は「タダなら来てもいい」といわれ「やらせてください」とこちらから頭を下げ、集落の寄り合いで地元の承諾を得ました。土地のしきたりを尊重するのは海外での支援と同じです。

6年間に延べ1000人が訪れました。安心安全な産直米を作り、家族で移住する人まで現れました。勇気を得た村人が「これからは自分たちの力で進む」と決めたのを受けて昨年末に「自立式」を開き、活動を終えました。国際支援の手法を地域おこしに生かせたのは、うれしい驚きです。

（聞き手は編集委員　野村浩子）

人間発見

NPO法人JEN事務局長

木山（きやま） 啓子（けいこ）さん

紛争・災害地に心のケアを ②

きかん坊の姉と対照的におとなしい少女時代

大学でのめり込んだ馬術、調教から多くを学ぶ

女性では珍しい営業職に、好成績だが昇格遅く

父は電機会社の会社員、母はパートに精を出す働きもの、東京都足立区にある社宅の団地で育つ。

4階建てのアパートが14棟並ぶ社宅の団地で育ちました。団地の子どもらと集団登校して、帰宅後はアパートの谷間で缶蹴り、縄とび、けんけん遊び。きかん坊だった姉を冷静に眺める、あまり自分の欲求を口にすることのない、おとなしい子どもだったと思います。

マイホームを夢みながら小さな車で小旅行を楽しむ、高度成長期のごく平均的な家庭です。幼い頃から両親が折にふれ「お父さんは夜学だから出世できない」と言っていたのが印象に残っています。父は成績優秀だったけれど貧しい家庭で、少しでも上に行くため志願して中国に従軍しました。ところが間もなく戦争が終わり、夢ついえて就職。働きながら夜間の高校・大学に通ったのです。

昭和ひとけたの厳しさからか、父は私に「お前は0点だ」と何かにつけて厳しい評価をしました。かたや母は「あなたは優秀だから何でもできる」と思っていたのか、私が学校から帰るや「今日は何をほめられたの」と尋ねる。しばしば言葉に詰まったものです。次第に「私は駄目だ」と自己否定の気持ちが芽生えたようで、つい最近まで悩まされました。しかし今振り返ってみると、十分に愛されて育ったのだと思います。

大学の馬術部時代

親は教育熱心で、姉に続いて中学から都内有数の進学校、桜蔭学園に進む。

中学高校と成績は中の下くらい、周りが優秀だからまあいいかと思ってしまい、リーダーシップをとる機会もありませんでした。ところが中学時代のある日、家庭科の先生が気に入らないから授業をボイコットしようと級友が入り口に鍵をかけた。私は「そんなことやめようよ」と立ち上がりました。閉め出される先生の気持ちを考えると耐えられなかったのです。子どもの頃から「もしも自分がこの人だったなら」と考える憑依（ひょうい）体質だったようです。

立教大学法学部に進学、体育会の馬術部に入ってすぐにのめり込みました。毎日、大学のある東京・池袋を素通りして馬場のある埼玉・志木に直行です。馬上でどれほど揺られても、馬が指示とは違う行動を取ったら違うと知らしめ、できたらほめる、それが調教だと知りました。4年生を終える頃には上達し、人馬一体の感覚を味わったこともあります。馬から教えられたことは多いですね。指示を出すにはぶれないこと、明確であることが必須。組織を運営する上でも同じです。

卒業後は就職部の紹介で、中堅の電機会社に就職する。

調教師など馬とかかわる道に進みたいと思ったものの、すぐには食べられないと考え、電機会社に就職しました。最初に配属されたのは経理部。お茶くみ、コピーとり、何もかも楽しくて自分なりに工夫をしました。電卓をたたくのも、もっと速く正確にと練習するうちに皆から驚かれるほどになります。そうした姿勢を見ていてくれたのか、貿易部の部長から「うちにこないか」と誘われました。

当時の女性では珍しい営業職です。商社を相手に交渉して、香港や米国で自社の製品を販売してもらう。当時大ヒットした超音波加湿器の販売台数を、飛躍的に伸ばしたこともあります。加湿器ブームがすごすぎて、各社とも部品が調達できず生産が間に合わない。上司に相談して取引先の部品メーカーに出向き、頼み込みました。「セラミックの部品は焼くのに時間がかかるから無理だよ」と言われても「そこを何とかお願いします」と。本来なら購買部の仕事ですが、できることは何でもやろうと駆け回りました。

入社3年目のこと。同期の男性がみな昇格するなか、営業成績が良いはずの私は取り残されました。女性は昇格に5年かかる人事制度だったのです。部長に尋ねるとすぐに社長室に駆け込んでくれ「君だけ4年で昇格するよう交渉したよ」と言います。私だけ特別扱いというのは納得できませんでした。ちょうどその頃、営業会議で根回しなしに率直な発言をしたところ、役員から烈火のごとく怒られました。論理的に説明する力がないからだと考え、退職、留学して勉強しようと決意しました。

（聞き手は編集委員　野村浩子）

人間発見

NPO法人JEN事務局長

木山（きやま） 啓子（けいこ）さん

紛争・災害地に心のケアを ③

米国留学後、仕事につまずき岡山のNGOへ

親から自立するためネパール行きを決意

貧しさゆえに病死、現実に打ちのめされる

費用をため、28歳で留学。ニューヨーク州立大学バッファロー校の修士課程で女性学を学ぶ。帰国後は旅行会社で教育事業、コンピューター関連会社で営業の仕事をした。

「留学経験を生かせる仕事をやるべきよ」。友人から叱られて、国際会議のコーディネートなどをする会社に転職しました。ところが自分でもあきれるほど仕事ができない。政府開発援助（ODA）に女性の視点を取り入れるという英文資料を渡され要点をまとめろと言われても、時間ばかりかかりうまくまとめられない。1年もたないうちに「もう無理だね」と肩たたきにあってしまいました。

それはもう落ち込みました。駄目人間の烙印（らくいん）を押された気分です。自宅に引きこもっていたら、同じ友人が「じゃあ非政府組織（NGO）はどうかしら」と言います。国際支援の関係者が集まるカレーパーティーで、岡山に本部を置くアジア医師連絡協議会（AMDA）という医療支援団体を紹介されました。採用が決まり、東アフリカのジブチ赴任はどうかという。どんなところか興味がわきました。何より解雇されたのは旧ユーゴ、2番目はジブチだといいます。AMDAの代表者に相談し、まずは比較的治安のいいネパールに行くことにしました。今度は親に内緒でアパートを引き払い、友人宅に居候して出発直前に連絡を入れました。

実は留学した時も親から猛反対されています。「今あなたがすべきことは結婚して子どもを産むことだ」と。親の言うことを聞けないのは悲しいけれど、一方で親の言いなりの人生はイヤだと思いました。ネパール行きは親からの自立でもあったのです。

1994年、ネパール東部ダマックの病院に医療コーディネーターとして着任した。

見るもの聞くものすべてが新鮮。夕食が毎日カレーということすら面白く思えたものです。給料は月7万円。新卒時の初任給は12万3400円でしたが「お役に立てないのにありがたい」という気持ちでした。本部は「仕事は自分で探してください」という。それが性格にあっていたようです。炎天下に列をなす患者に聞くと「自宅から2日かけて歩いてきた」という。待ち時間を減らす改善策を考えました。

ある日、急患で3歳くらいの女の子が運び込まれてきました。体の前面が半分ほど泥のようなものに覆われ、異臭を放っています。大やけどを負い伝統療法の薬草を塗っていたとか。数日経っても治るどころか悪化して患部がうんできたのです。幸い一命はとりとめましたが、やけどの痕がケロイドとなり、動くのもままなりません。

女の子の愛称はナマステちゃん。がに股で必死に歩く姿を見ていて、たまらなくなりました。首都カトマンズの病院で皮膚移植を受ければ治るはず。聞けば私の小遣いで何とか手術を受けられそうです。「その後どうするの？ 教育費まで出すのか」、現地の医師に冷ややかに言われました。

感傷的になっていた自分を恥ずかしく思いました。結局、ナマステちゃんは皮膚移植を受けなかったものの元気に退院。しかし病院に勤めた2カ月半の間、日本の医療なら救えたはずの病などで7人が命を落としました。その時は貧しさゆえの過酷な現実に、ただただ圧倒され打ちのめされました。

間もなくAMDAから「旧ユーゴに行ってくれ」という連絡が入ります。AMDAなど6団体で難民支援の合同プロジェクトJEN（Japan Emergency NGOs）を始めるというのです。いったん帰国し、10日後にクロアチアのザグレブに向け出発しました。

いざ住居兼事務所を構えると、やるべき仕事が頭にどんどん浮かんできました。現場のニーズを把握して、さまざまな人と交渉しながら計画をまとめていく。「支援の仕事は面白い」と思うまでに、時間はかかりませんでした。

（聞き手は編集委員　野村浩子）

やけどを負った少女ナマステちゃんと

人間発見

NPO法人JEN事務局長

木山（きやま） 啓子（けいこ）さん

紛争・災害地に心のケアを ④

「9・11」後、人道支援団体も危機管理を強化

バグダッドでは感染病を防ぐ衛生教育に尽力

海外で休みなく支援活動、ついに心身が悲鳴

2000年に帰国。特定非営利活動法人（NPO法人）JENが正式発足し事務局長に就任する。01年9月11日に米同時多発テロが起き、国際支援の仕事は厳しさを増した。

イラクの復興支援では、現地調査のため現地入りしました。03年4月9日にフセイン政権が崩壊、20日からヨルダンで待機して情報収集しました。JENのスタッフ2人も一緒で、彼らの命は何としても守らなければなりません。「米軍が徒歩パトロールを始めた」との知らせを受けて最低限の治安が確保されたと判断し、現地入りを決めました。

26日にヨルダンで手配した車で出発。国境近くで他の非政府組織（NGO）と待ち合わせをして隊列を組んで向かいました。追い越しざまに車を止められ襲われるのが一番怖い。そこで反米派の多いラマディ付近では、数車線ある道路を支援仲間らの車で横に隊列を組んで、全速力で走り抜けます。万が一襲われたときはすぐ現金を渡せるよう、ポケットに各自200ドルを入れておきます。

極度の緊張のなかたどり着いたバグダッドは、軍や政府施設は徹底的に破壊されているものの、その他は意外なほど美しい町並みでした。チグリス川がゆったり流れ、夕陽を背景に宮殿とヤシの木のシルエットが影絵のように浮かび上がる。川沿いには千夜一夜を題材にした像が立ち並び文化の薫りに満ちていました。

イラクの学校修復調査で現地の子どもたちと（2003年3月）

ところがその後、戦闘の前線に近づかない限り身の危険はあまりありませんでした。ところが、「9・11」を境に状況は一変した。援助関係者がテロの標的とされるようになったのです。支援先では政府関係者の集まりには近づかない、役人との会議は役所以外の建物で開くなど、情報収集に基づいた危機管理をより強化する必要に迫られています。

どんな支援をするのか。現地で数カ月かけてニーズ調査をする場合もあるが、緊急支援は国連や海外NGOと話し合い、役割を調整する。

バグダッドは占領下にあったため、ジュネーブ条約に基づいて米軍が治安の維持、食料、水、医療を提供する義務を負っていました。それ以外のニーズを探り、海外NGOとも調整をした上で、JENは教育支援をすることにしました。学校の建物やトイレの修復、感染病を防ぐための衛生教育などです。

バグダッドから地方へ支援を広げていき、昨年からはイラクの少数民族で独立を求めて闘うクルド人居住地でも活動を始めました。国連、赤十字、大使館へと攻撃が続き、急速に治安が悪化。JENの国際スタッフはアンマンに引き揚げ、現地のイラク人スタッフと連携しながら遠隔で活動を続けることにしました。

かつて人道支援団体は車に日本や国連の旗を立てれば襲われないというのが暗黙の了解でした。紛争が続く旧ユーゴにいたときも、03年からバグダッドで休みなく支援を続ける日本のNGOはJENだけです。ただし日本の旗を掲げると危険なため、日本による支援と伝えられないのが残念です。

休みなく走り続け、ついに心身が悲鳴を上げた。

イラクから戻った頃からでしょうか、新聞が読めなくなり、外出の身支度すら苦痛になってきました。「自分は駄目だ」という自己否定も頭をもたげてきました。振り返ると、10年近く走り続けていたのです。旧ユーゴの6年間、休みらしい休みをとったことがなかった。日本に戻ってからはモンゴル雪害、アフガニスタン内戦、インド西部地震、エリトリア帰還難民、イラク復興と数年の間に立て続けに支援を重ねました。あれもこれもやらなければと深夜3時、4時まで残業続きでした。

ある日、からだにむち打つように身支度をして自宅マンションのエレベーターに乗ったところ、上の階から降りてきたおじいさんが私を見て「ああ、きれいだね」と言ったのです。その瞬間、おじいさんが神様に見えました。「ああ、神様から愛されている」と。友人から誘われた老荘思想の勉強会でも救われました。「生きているだけで満点だ」。先生から繰り返し声をかけられ、少しずつ重荷をおろすことができました。

（聞き手は編集委員　野村浩子）

人間発見

NPO法人JEN事務局長

木山（きやま） 啓子（けいこ）さん

紛争・災害地に心のケアを ⑤

ハイチの復旧支援では、現地の人の自立を重視

NGOの質高めるため、職員の地位向上に注力

「リーダーを育てられるリーダー」世界で育成

2010年1月12日、ハイチ地震が発生した。被害が甚大な上に治安の悪化が心配された。海外の非政府組織（NGO）と連絡を取り合い最低限の安全を確認、18日にスタッフが現地に入った。

ハイチに向かったのは、フランス出身の海外事業部長。「暴動は一部地域のみ」と連絡が入りホッとしました。現地調査をした彼から、建設資材の緊急配布、そして感染症の流行を防ぐ衛生支援をする計画案が送られてきました。

支援により現地の人の自立がどう促されるのか――。計画案で私がまず確認する点です。ハイチで建設機材を配るときも住民に話し合いを求め、緊急性の高い人のリストを出してもらいました。こうした情報を住民みなで共有することが大切なのです。

支援をしたのは、首都から西へ約40キロのグランゴアーブ地区。汚染された井戸や洗濯する川辺から飲み水をとっていて下痢がまん延していました。マラリアやコレラの流行が心配です。80基の井戸の修復に取りかかりました。新たな井戸には使用料を徴収することを住民に提案しました。合意形成をして地域で管理を続ければ住民の結束が強まるからです。

実は震災から10カ月を迎えた昨年秋、ハイチを訪れ悲しい思いをしました。天気予報によると明日にでも大型ハリケーンがくるという。「どんな対策をとるつもりか」と住民に尋ねても「別に」という答え。被災前から長年、米国などの援助を受けてきたこともあり、依存心が強くなってしまったのです。「自立への道のりは遠いが、我々のやるべきことはたくさんある」。決意を新たにしました。

Chabo!に参加する著者らが集う寄付イベントでハイチの支援を報告

各地域から無償ボランティアとして働く衛生プロモーターも募りました。せっけんでの手の洗い方、水や食料の管理法などを村人に教える役割を担う。彼らが地域のリーダーとなることを期待しています。

JENの活動資金は年間約6億円。欧米と日本ではNGO予算の桁が違う。

米国をみると米国際開発庁からNGOへの拠出金は08年で約2500億円になります。日本では政府開発援助（ODA）からの拠出は10年度でODA予算全体の1・8%、111億円にすぎません。

それでも、00年にジャパン・プラットフォームという国際支援協力組織ができ、政府や企業の協力が得やすくなりました。私は設立からかかわり、この春からは富士ゼロックス元社長の有馬利男さんと共同代表理事を務めます。NGOの質を高めてODAからの拠出金を増やし、職員の社会的地位を上げていきたいと考えています。

JENは市民や企業からの寄付もまた大切にしています。最近はChabo!（チャボ）というプログラムからの寄付が増えてきました。ビジネス書の著者たちが印税の2割を寄付してくれるもので、この3年弱で約9000万円に上ります。この他にも寄付付き商品の販売や古本寄付など参加しやすい仕組みを工夫しています。

国際スタッフ27人、各国の現地スタッフ103人を束ねるには苦労もある。

なんと自分は無力なのか、事務局長となり思い知りました。現地責任者として実践は重ねたものの、組織運営の理論がわからない。スタッフに仕事を任せられないから人が育たない。小さなミスを連発する。もう頭を抱えました。「スタッフの未熟さを責めていた自分に原因がある」。あるとき問題の根っこに気づきました。昨年チームリーダーに肩書をつけて、責任の所在を明らかにしました。肩書効果は驚くほどで、スタッフの成長ぶりに内心喜んでいます。

この4月から、現地スタッフの選抜研修を日本で始めます。「リーダーを育てられるリーダー」をつくる。自国で活動を広める人材を育ててもらうのです。まずはスーダン、アフガニスタン、イラク、スリランカ、パキスタンから6人が来日し、現場でのニーズ調査や事業形成法などを学びます。これを国に持ち帰って実践しながら身に付ける。2年がかりの研修プログラムです。現地の人が現地の人のために支援活動を展開する、そんなリーダーが世界各国に広がることを夢みています。

（聞き手は編集委員　野村浩子）

次回は鉄道博物館長の関根徹さん